

[タイトル]

企業資料における 経営者関係資料を読み解く

資生堂企業資料館「福原信三」資料の分析と
ISAD(G)記述の適用から

Study of Executive-Related Records Archived in Corporate Records: Analysis of Shinzo Fukuhara's Records Stored in the Shiseido Corporate Museum and Application of the ISAD(G)

[著者]

清水ふさ子 | Fusako Shimizu

[キーワード]

| 企業資料 | 個人資料 | ISAD(G) | 資生堂 | 福原信三 |
corporate records / personal records / ISAD(G) / Shiseido / Shinzo Fukuhara

[要旨]

本稿は資生堂企業資料における経営者関係資料「福原信三」を題材に、(1) 国際標準ISAD(G)を適用した目録記述により、既存目録の課題を解決すること、(2) 企業資料内における経営者関係資料(個人資料含む)がどのような位置付けを有するのかを考察すること、を目的とする。「福原信三」資料の分析の結果、この資料群は伝記編纂のために収集された、個人資料を含む組織資料と、それとは別に蓄積された展覧会資料の混合体であることがわかった。福原信三の自筆原稿は写真、芸術、銀座が主なテーマであり、そこには彼の思想や、経営者としてのビジョンが反映されていた。「福原信三」資料のISAD(G)目録記述では、資料の階層構造を記述し、資料情報の充実を図ることで既存目録の課題を解決した。「福原信三」資料は資生堂にとって組織のアイデンティティの源泉を内包するものであり、組織資料とは別方向から企業を説明しうる重要な資料群なのである。

This paper, with former President Shinzo Fukuhara's records stored in the Shiseido Corporate Museum as its subject matter, aimed to solve issues of the existing catalog using an archival description to which the ISAD (G) (General International Standard Archival Description) was applied, and to consider the role of the documents (including personal information/materials) related to executives within corporate records. Following a review of Shinzo Fukuhara's records, it was revealed that this group of documents consisted of institutional records including personal records which were collected for the purpose of compiling a personal history, and others randomly accumulated for use for exhibitions. His handwritten manuscripts were primarily for the themes of photography, art and the Ginza district, on which his philosophy and vision as President of Shiseido were reflected. With the new catalog for Fukuhara's records based on ISAD (G), a hierarchical structure was adopted to perfect the information, thereby solving the problems of the existing catalog. Shinzo Fukuhara's personal records are very important for Shiseido, as they involve the source of a corporate identity, and can explain a corporation from a perspective that is different from the institutional records.

1 ――はじめに

1-1: 研究目的と方法

かつて「鼻の福原」と称された社長がいた――資生堂初代社長^[1]福原信三（在任期間1927-1940）のことである。鼻の形がどうこうではない。それだけ香りにこだわったということだ。彼は資生堂においては経営者、薬剤師、調香師、アートディレクターなど、さまざまな役割を持ち、社外では写真家としても活躍した。近年、「福原信三と美術と資生堂」展（世田谷美術館、2007年）や「美を掬（すく）う人 福原信三・路草 ――資生堂の美の源流――」展（資生堂、2016年）といった展覧会が開催されている。これらの展覧会名からも、福原信三と資生堂の美意識には大きな関連性があることが伺える。

資生堂は1872年に東京、銀座に福原有信（福原信三の父にあたる）によって日本初の洋風調剤薬局として開業し、現在は化粧品、日用品の製造販売やレストラン事業などを行っている。資生堂は静岡県掛川市に資生堂企業資料館というアーカイブズ機関を持っており、文書資料群の中に「福原信三」資料がある。しかしながら、これまでの福原信三関連の展覧会では、「福原信三」資料という一次資料があるにも関わらず、伝記『福原信三』（1970）や、社史『資生堂百年史』（1972）などの刊行物が参照されてきた^[2]。その理由は既存の「福原信三」資料目録が利用しにくいということにあった。筆者は、今回その「福原信三」資料の調査と新目録を作成する機会に恵まれた^[3]。冒頭述べたような福原信三の経営者としての側面と、文化的、芸術的な活動が資料群にどのように反映されているかが注目される。

本研究の目的は、この資料調査に基づき、(1)「福原信三」資料目録が抱える課題を、アーカイバル記述の国際標準であるISAD(G)適用の目録記述にて解決を試みること、(2)資料分析を通して、経営者関係資料（個人資料含む）が、資生堂の企業資料全体においてどのような位置付けを有するのかを考察することにある。

研究方法としては、まず、既存の目録と資料群の現状分析を行う。そして段階的調査^[4]を採用し、第2段階の内容調査、第3段階の資料群の構造分析までを行う。調査内容を元にISAD(G)記述を試み、新目録の利便性の向上を検証する。また、後述する通り、福原信三の社長時代の経営を実質的に支えたのは、後に二代目社長となる松本昇であった。そこで、この当時の経営実態を知るうえで欠かせない二人の人物について、ISAAR(CPF)を適用した人物記述も試みた。

なお、本稿で扱う資料群には資料名に人名が付されているため、資料群を指す場合はカッコ付きの「福原信三」とし、本人を指す場合はカッコなしの表記とする。

1 ―― 資生堂創業者は信三の父である福原有信である。信三は1915年、資生堂の経営を二代目として引き継ぎ、資生堂が株式会社化した1927年に初代社長に就任した。

2 ―― 資生堂企業資料館、中野氏への聞き取り調査による。(2016年11月2日)

3 ―― 筆者は学習院大学大学院アーカイブズ学専攻におけるアーカイブズ実習(2014年7/29～31、8/19～21、9/2～5の計10日間)を資生堂企業資料館で行った。この実習にあたって、資生堂企業資料館中野氏から受けた依頼は、目録が使いにくいとされる「福原信三」資料の調査及び新目録作成であった。

4 ―― 段階的調査とは、1概要調査2内容調査3構造分析4展開調査のことである。(安藤正人「記録史料学と現代」吉川弘文館、1998年、31頁)

5 — 武田晴人「企業史料に関わって
きて」記録管理学会「レコード・マネジメン
ト」No48、2004年、57頁

6 — 武田、前掲5、57頁

7 — 山一證券(1997年経営破たん)資
料は東京大学 経済学図書館・経済学部
資料室へ、北海道拓殖銀行(1997年経
営破たん)資料は北海道開拓記念館(現
北海道博物館)へ、鐘紡(2002年破たん)資
料は神戸大学 経済経営研究所 附属
企業資料総合センターへ収集された。

8 — 経団連初代会長、石川一郎
(1885-1970)が1940年ころから会長を辞
任する1956年までにファイルした関係機
関・組織の文書類。現在は東京大学経
済学部資料室に収蔵されている。

9 — 武田晴人「経営史料としての個
人文書—石川一郎文書の整理に即し
て—」『企業と資料第1集』企業史料協
議会、1986年

10 — 三井文庫や住友史料館、三菱
経済研究所三菱史料館などが挙げられる。

11 — 日本における企業(ビジネス)アー
カイブズの動向については企業史料協
議会や渋沢栄一記念財団情報資源セ
ンターの調査研究に詳しい。

12 — 三井文庫においては史料集『三
井銀行史料 全6巻』(日本経営史研究所、
1978年)を刊行しており、一次資料の公開
を出版という形で実現している。これは継
続中の企業の中では稀なケースと言える。

13 — 小風秀雅も「これまで企業記録
へのアプローチは、経済学ないし経営学
の視点から企業活動の経済的・経営的
側面を分析するもの」と指摘する。小風秀
雅「近代の企業記録」国文学研究資料
館編『アーカイブズの科学』下巻、柏書房
2003年、73頁

14 — 矢部信壽「福原信三」、資生堂、
1970年ほか、社史類には必ず信三に関
する言及あり。その他に資生堂企業文化
部紀要「おいでるみんな」vol.1～24(1996
～2012)にはたびたび福原信三が研究
対象となっている。

1-2: 研究史の整理

日本における企業資料研究の歴史はそれほど古くない。明治以降に発達した私組織である企業の資料が公開されるという前提は長らく存在しなかったからだ。1960年代から70年代に経営史、経済史を中心とする研究者によって産業研究が盛んになったことから、企業資料の学術的な利用が始まったとされる[5]。一方、企業側からの動きとして、社史編纂を前述のような外部研究者に委託するようになり、企業の内部資料の部分的なアクセスが可能になっていった[6]。90年代以降、大企業の経営破たんが相次ぎ、それら消滅企業の資料を自治体や大学が引き取ることとなった[7]。そのことが却って企業資料の公開を促し、研究活動に寄与するという皮肉な結果となっている。経済史、経営史研究においては、石川一郎文書[8]をはじめとした、企業関連資料を含む個人資料が大きな役割を果たしてきた[9]ことも付記しておく必要があるだろう。

経営活動中の企業では、旧財閥系の所有する研究機能を兼ね備えた大規模なアーカイブズ[10]をはじめとして、資(史)料館、資(史)料室、社史編纂室などの名前で自社資料の保全と活用が図られている[11]。

以上のことから、現在の企業資料の保存管理に関しては企業内の組織アーカイブズと他研究機関(大学や博物館など)中心の収集アーカイブズの2系統が存在する。もちろん資生堂企業資料館は前者のアーカイブズ機関に当たる。

ここまで企業資料を取り巻く研究史を整理してきた。組織アーカイブズにおいては、会社ごとに違う体制がとられていると言ってもよく、公開に関しては部分的である[12]。そのため、研究対象としての企業アーカイブズが論じられにくい現状がある。一方、公開が可能となっている収集アーカイブズに関しては、資料受入れ先が主に経済、経営学部であり、アーカイブズ学的見地からの研究がなされてきたわけではない[13]。これらの点が企業アーカイブズ研究の抱える課題である。

福原信三の先行研究に関しては資生堂社内における研究蓄積が充実している[14]。外部研究者によるものとしては経営者として当時のマーケティング手法に注目したもの[15]、写真家[16]やアートディレクター [17]の面に注目したものがみられる。ただし、資生堂の企業資料に着目した研究は乏しい[18]。

これらの点から本研究は企業アーカイブズ研究推進の一端を担うものとする。

2 — 研究対象と資料調査について

本章では、まず福原信三の足跡をたどり、事績を確認する。次に、資生堂企業資料館の収蔵資料(資生堂企業資料[19]と称する)の全体像とその中における「福原信三」資料の位置確認を行う。最後に、現在の目録の分析を行い、資料調

査の方針を示す。

2-1: 福原信三について

福原信三(以下信三)は1883年、資生堂の創業者である福原有信の三男として東京、銀座に生まれる。千葉医学専門学校(現千葉大学医学部)とコロンビア大学薬学部卒業後、1915年に資生堂の経営を引き継ぎ、事業の主軸を医薬品から化粧品へと転換させる。1927年に株式会社化した際の初代社長に就任し、1940年に会長となる。そして終戦後の1948年に逝去した。信三は経営に参加したのち、新たな機能を持つ部門を以下のように立ち上げている。

- 1916年 試験室の発足(現リサーチセンター)
- 1916年 意匠部の発足(現宣伝・デザイン部)
- 1919年 資生堂ギャラリー(当初は「陳列場」)の開設(現企業文化部 資生堂ギャラリー)

医薬品から化粧品へ事業を転換するにあたり、信三がまず取り組んだことは、新製品の開発^[20]であり、それには試験室が欠かせなかった。信三が処方したヘアトニック「フローリン」(1915)^[21]や「七色粉白粉」(1917)^[22]は大きな評判となった。なかでも、信三が製品開発で最も力を入れたと言われるのが香水である^[23]。当時(大正初期)はパリからの輸入品か、その模造品がほとんどであった中で、資生堂は1917年に日本人による初の本格的調香と言われる香水「花椿」^[24]を誕生させる。その10年後には香水が資生堂の主力商品であり、看板商品となっていた^[25]。

次に、意匠部を立ち上げ、商品、パッケージ、広告などのデザインに力を入れる。そして「陳列場」において新作香水の他、西洋風の鏡台や化粧用具などを展示販売し、新しい化粧文化を発信しようとした。この陳列場は陳列企画のない期間に、若手アーティストの個展用に無料で貸し出されるようになったことから「資生堂ギャラリー」として知られるようになる^[26]。資生堂ギャラリーは日本で現存する最古の画廊と言われ、現在まで3100回以上の展覧会を開催している^[27]。このように、信三は今日の資生堂の核となるブランドイメージを確立する上での様々な試みを行っていったのだが、そこには、彼の企業経営の側面に留まらない多彩な文芸活動があった。とりわけ、彼の個人活動で特筆すべきは写真家としての活動である。信三の写真家としての活動と著書を略歴としてまとめた^[28]。[表1参照]

早くに芸術に目覚めた彼は12歳で日本画を、13歳で洋画と写真を始めた^[29]。14歳でアマチュア写真会である「東洋写真会^[30]」に入会し1898年、最年少(15歳)で入賞を果たしている。表1からも分かるように、写真家としての個人的活動に留まらず、写真雑誌の創刊や関連団体の役職を務め、写真界もけん引していたことがわかる。信三の目指していた写真表現はのちに主流となる報道写真で

15 — 山本敦「戦前の資生堂にみる日本的マーケティング・チャネルの形成」『産研論集 9』札幌大学、1992年、岡田芳郎「広告・メディア界の礎を築いた人々(第18回)常識に捉われないプロモーションを行った三代鈴木三郎助・福原信三」『宣伝会議』(848)、2012年、藤岡章子「日本におけるリレーションシップ・マーケティングの先駆的展開 — 戦間期の資生堂の「花椿会」活動を中心として —」『経済論叢別冊調査と研究』第17号、京都大学、1999年

16 — 飯沢耕太郎「福原信三の「孤独」」資生堂企業文化部編「研究紀要おいてるみんな」vol.1、資生堂企業文化部、1996年

17 — 「福原信三と美術と資生堂展」世田谷美術館、2007年

18 — 角山紘一「企業資料の収集と保存 — 現場からの考察 —」(前掲16)が資生堂企業資料を扱った唯一のものである。

19 — 資生堂が所有する全資料という意味では、資生堂企業資料館所蔵の資料に加え、各部署で保管されている資料も含めた「資生堂資料」というべき資料群が存在する。しかし、本研究では対象が資生堂企業資料館の収蔵資料であるため、それを「資生堂企業資料」と称する。

20 — 信三はアメリカ留学中に見習いをしてたドラッグストアで処方書を書き許され、それが帰国後の製品開発のアイデアの元になったとも言われる。(矢部信壽「福原信三」資生堂、1970年、83頁)

21 — 第一次世界大戦の影響で舶来品の輸入が途絶えていたが、舶来品にも質の劣らないフローリンがヒット商品となった。〔「資生堂ものがたり」1、資生堂企業資料館、1995年、13頁〕

22 — 白、黄、肉黄、ばら、牡丹、緑、紫で、個人の肌色に合わせた処方となっていた。前掲21、18頁

23 — 大正年間に信三によってプロデュースされた香水だけでも38種類に上る。(資生堂企業文化部編「研究紀要おいてるみんな 香り」と意匠 — 資生堂香水瓶物語」資生堂、2008年)

24 — 前掲21、16頁

25 — 『資生堂月報』(1926年)の商品目録には「香水」「頭髮香水」「化粧水」「白粉」「クリーム」「石鹸と歯磨」「雑」の順となっており、香水がすでに主力商品となっていたことが伺える。

26 — 展示に関しては信三による審査があり、彼の納得がいかないものは断られたと言われる。矢部、前掲20、124頁

27 — 以下参照『資生堂ギャラリー七十五年史：1919-1994』資生堂企業文化部編、資生堂、1995年、資生堂HP (<https://www.shiseidogroup.jp/gallery/access/>) (アクセス日：2016年9月20日)

28 — 『光の詩人——福原信三・信辰・信義 写真展』(資生堂企業文化部、2005年)と前掲20を参考に筆者がまとめたもの。

29 — 福原義春「伯父 信三、信辰と父信義」、『光の詩人——福原信三・信辰・信義 写真展』(2005年)、前掲28

30 — 写真家宮内幸太郎を中心に実業界で写真を嗜む人々によって結成された。(遠藤みゆき「東京写真研究会「研展」と「芸術写真」の形成」『早稲田大学大学院文学研究科紀要 第3分冊、日本語日本文学 演劇映像学 美術史学 表象・メディア論 現代文芸 60』2015年)

31 — 福原義春(資生堂名誉会長)は戦中、戦後にかけては報道写真の優勢が目立ち、信三が注力した「芸術写真」というカテゴリは近年までしばしば批判対象、もしくは写真史の中から抹殺されてきた、と語る。(福原義春「伯父、信三・路草——『美しい光の流るる處 福原信三・路草写真展』(1992年3月18日～5月10日)から——」『おいでるみん』vol.11、資生堂企業文化部、2001年)

32 — 伊藤肇「ボランティアチェーンの先覚者 松本昇」時事通信社、1972年

33 — 矢部、前掲20、112～113頁

表1 — 福原信三の活動と著書一覧

年代	できごと
1921年	「銀座」(資生堂)刊行 弟信辰(路草)らとともに「寫眞藝術社」を結成。月刊写真誌「寫眞藝術」を創刊。 光と影の濃淡の調子が写真の第一義とする写真理論「光と其諧調」を展開
1922年	写真集「巴里とセイヌ」刊行
1923年	「光と其諧調」(寫眞藝術社)刊行 関東大震災により「寫眞藝術社」の活動が中断
1924年	「日本写真会」設立 初代会長に就任
1925年	「アサヒカメラ」創刊へ参画
1926年	「日本写真会」の月刊写真誌「日本写真会 会報」創刊 「全関東写真連盟」の創立に参画。委員、審査員を務める 「日本写真美術展覧会」の審査員になる 「全日本写真連盟」の発足、委員、鑑査員になる
1927年	国際写真サロンの鑑査員になる 「フォトグラムズ・オブ・ザ・イヤー」の日本部担当者になる
1929年	国際広告写真展覧会の審査員になる
1930年	写真集「身辺風景」(資生堂)刊行
1931年	写真集「西湖風景」(日本写真会)刊行
1933年	「風景協会」が発足し、理事になる
1934年	「都市美協会」評議員になる のちに常務理事、監事を務める
1935年	「写真芸術」(新光社)刊行 写真集「松江風景」(日本写真会)刊行 写真集「巴里とセイヌ 複写版」(日本写真会)刊行
1937年	「旅の写真撮影案内」(朝日新聞社)刊行 写真集「布哇風景」(日本写真会)刊行 「日本写真家協会」が発足し、理事になる
1939年	「国画会」に写真部を創設
1941年	「(財)岡倉天心偉績顕彰会」の創立に参画 のちに評議員、常任監事を務める
1943年	写真集「武蔵野風物」(靖文社)刊行 「写真を語る」(武蔵書房)刊行 「写真芸術」(武蔵書房)刊行
1944年	「日本写真報国会」が発足、名誉会長に推薦される

はなく、光の濃淡や、構図、風景の美しさを追求した「芸術写真」であった^[31]。そのまなざしは都市空間にも向けられており、「銀座」地域のイメージ戦略にもつながっている。このような信三個人の芸術文化への造詣が、製品開発や企業ブランド創造にも密接に結びついていたことが理解されよう。

さて、信三時代の資生堂経営には欠かせない人物がもう一人いる。信三がアメリカ留学時代に知り合った友人で、後に資生堂2代目社長となる松本昇(以下松本)である。松本はニューヨーク大学でマーケティングを学び、帰国後三越百貨店に勤めていた^[32]。1917年、信三は松本を資生堂の支配人として招き、営業・販売の一切を任せ^[33]。1927年の株式会社化の際には専務取締役役に、1940年には2代目社長に就任した。戦後は参議院議員(自由党)としても活躍した。松本が実現した制度等、以下列挙する。

- 1923年 資生堂連鎖店制度開始(現チェーンストア制度)
- 1927年 販売会社制度開始(現資生堂販売株式会社)
- 1937年 愛用者組織「花椿会」発足(現花椿CLUB)

チェーンストア制度制定の背景として、大正年間、化粧品業界は値引き合戦の乱売に苦しめられていた[34]。そこで松本は資生堂と販売契約を結んだ店舗にのみ商品を卸し、定価販売を維持するチェーンストア制度を実施する[35]。そして、愛用者組織「花椿会」を発足させ、顧客満足と確固たる販売網を敷くことに尽力した。「信三は試験室で次々と製品を開発し、それを松本が精力的に販売する」[36]といった二人のチームワークは初期の化粧品メーカー資生堂の推進力であった。また、二人の立ち上げた組織と体制は戦後の資生堂の発展を支えた。松本を資生堂に招いたことは信三の大きな経営業績といえるだろう。

以上のように、1915年に信三が資生堂の経営に参画し、1917年に松本が支配人となってからの資生堂は、本業の変化、組織の拡大、株式会社化と、大きく変革を遂げる。この時期は資生堂史にとって重要な転換点である。このことをふまえて「福原信三」資料を見ていく。

2-2: 資生堂企業資料における「福原信三」資料

資生堂企業資料館(以下、企業資料館)は株式会社資生堂、企業文化部所轄であり、創業120周年の1992年に静岡県掛川市、資生堂掛川工場敷地内に開館した。収蔵資料は文書資料、商品、宣伝制作物、美術工芸品など約24万点が保管されている。収蔵資料の充実ぶり、その活発な活動は日本における企業アーカイブズの先駆的事例として注目されている[37]。今回の調査対象である「福原信三」資料は文書資料群中の、大分類(分類A)「歴史」>中分類(分類B)「創業・人物」>小分類(分類C)「福原信三」に分類されているもので、資料番号数65点である。収蔵資料全体における位置関係を以下に示す。[図1][38]

34 — 「資生堂社史—資生と銀座のあゆみ八十五年」資生堂、1957年、170頁
 35 — 梅本博史「化粧品業界の動向とカラクリがよくわかる本 第2版」秀和システム、2008年、26頁
 36 — 矢部、前掲20、115頁
 37 — 西川康男「資生堂企業資料館における企業アーカイブズの戦略的取り組み」『情報の科学と技術』情報科学技術協会62巻10号、2012年、440~444頁、公益財団法人渋沢栄一記念財団 情報資源センター 松崎裕子氏報告「資生堂のアーカイブズ：サステナビリティとトップ・マネジメント・チェンジ」ICA/SBA主催 ビジネスアーカイブズ国際シンポジウム「サステナビリティ」2016年4月5日、米国、アトランタ
 38 — 図1をふまえ、以降、資料階層を表現する際は階層レベルを頭に記し「A歴史>B創業・人物>C福原信三」のごとく示す。

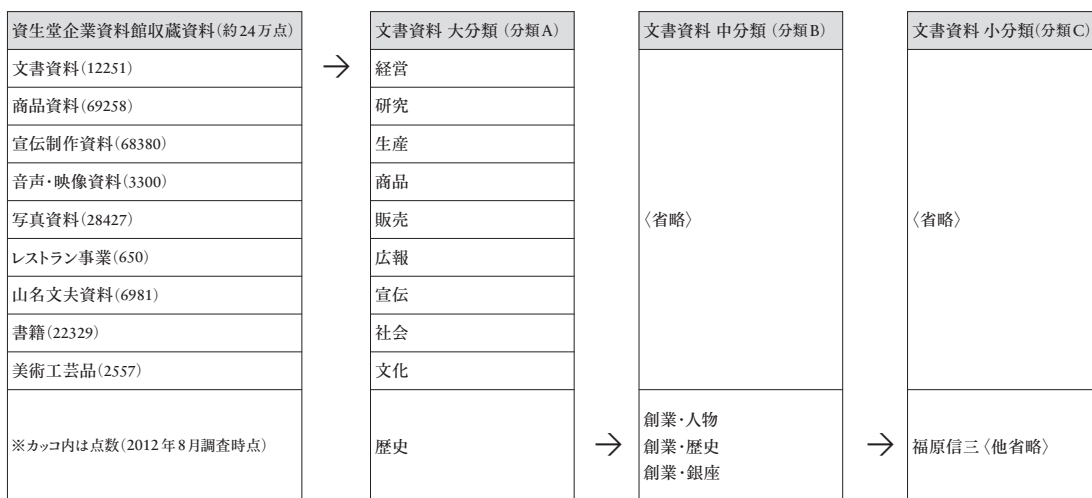


図1 — 資生堂企業資料館収蔵資料と其中における「福原信三」資料

39 — 資生堂企業資料館中野氏の聞き取り調査による(2016年11月2日)

40 — 一般的なアーカイバル記述において「シリーズ」とは同じ蓄積・ファイリング過程、同じ機能(部局)、同じ活動や人物によって作成された文書群と理解される。以下参照: ICA用語集 <http://www.ciscra.org/mat/mat/term/4034> オーストラリア公文書館用語集 <http://www.naa.gov.au/records-management/publications/glossary.aspx#s>(最終アクセス日2016年9月20日)

企業資料館によると、この「福原信三」資料は1992年頃に本社から企業資料館に移管されたものであり、2009年に一度、資料整理がなされた[39]、とのことである。2009年に資料整理がされた際の目録が現在使われているものであり、今回調査対象となる目録である。

2-3: 既存目録の分析

企業資料館収蔵の文書目録と「福原信三」資料の概要について確認する。

文書目録の編成は大分類、中分類、小分類の階層となっており、小分類が資料群の最小単位となっている。小分類以下は個々の資料番号(アイテムレベル)である。大・中分類はいわゆる会社機能を大機能⇒中機能と分化させているタイトルになっている。一方、小分類は事業単位や部門、人名、団体名などであり、アーカイバル記述におけるシリーズ単位[40]と理解できる。そのため今後は小分類レベルの資料群を指す際にシリーズとも表現する。

企業資料館が現在使用している「資生堂企業資料館 文書資料目録」(以下既存目録)の項目は8項目(分類A / 分類B / 分類C / 入力No.(資料番号)/ 資料名/ 制作年/ 発行部門/ 収蔵棚No.)である。文書資料群において、一般的な組織資料例を以下に示す[表2]。

表2 — 資生堂企業資料館、文書資料の一例

分類A	分類B	分類C	入力No.	資料名	制作年	発行部門	収蔵棚No.
経営	人事	採用	101006001M	会社案内	1964年	人事部	R11C
経営	人事	採用	101006002M	会社案内	1965年	人事部	R11C
経営	人事	採用	101006003M	会社案内	1966年	人事部	R11C

表3 — ISAD(G)における必須項目と既存目録の項目比較表

ISAD(G)における必須項目	既存目録
3.1.1 参照コード	入力No.(資料番号)
3.1.2 タイトル	資料名
3.1.3 年代	制作年
3.1.4 記述レベル	分類A / 分類B / 分類C (ISAD(G)の記述レベルと正確に合致するわけではないが、階層を理解できる)
3.2.1 作成者名	発行部門
3.1.5 記述単位の大きさと媒体(量、容積、または寸法)	なし
なし	収蔵棚No.

表4 — 資生堂企業資料館 文書資料目録 抜粋

分類A	分類B	分類C	入力No.	資料名	制作年	発行部門	収蔵棚No.
歴史	創業・人物	福原信三	091022026M	福原信三 執筆文章、自筆原稿			L15C
歴史	創業・人物	福原信三	091027046M	福原信三 慶応、早稲田広告研究会誌寄稿文コピー		福原信三	L15C
歴史	創業・人物	福原信三	091027050M	福原信三 雑誌 他 掲載記事		福原信三	L15C

組織内で作成される文書資料はタイトル、発行部門、日付の記載があるものが一般的である。既存目録はそれらの基本的な情報が最低限記入されている。それでは、この既存目録項目は一般的なアーカイバル目録と違いはあるのだろうか。既存目録の項目と、国際標準の目録記述であるISAD(G)における必須項目を比較してみると表3のように対応する。

既存目録の項目において、ISAD(G)の必須項目6項目中、5項目は対応が見られ、欠けているものは3.1.5記述単位の大きさと媒体(量、容積、または寸法)のみであった。既存目録の対象は文書資料であり、資料が最小単位(ファイル、冊、状)の形式であれば大きな問題にはならない。表2の目録例を見る限り、既存目録の項目は検索に支障が出るほど情報が欠けているわけではなく、最低限の資料情報は満たすものとする。

次に「福原信三」資料目録から3資料分の抜粋を示す〔表4〕。表2の例とは違い、タイトルの曖昧さと、制作年と発行部門(作成者)の空欄が目立つ。

先に分析したように、既存目録は最低限の資料情報を満たすものであり、表4のように1項目でも情報が欠けるとたちまち資料理解が覚束なくなることが分かる。「福原信三」資料目録は年代、発行部門(作成者)の空欄が多く、当該資料65点の記述のうち、制作年が空欄のものは77%(50点)、発行部門の空欄は71%(46点)に上った。「福原信三」資料目録の大きな問題点は最低限の目録項目にも関わらず情報の欠落が多いところにあった。

入力No.(資料番号)と対応する資料の内容と範囲を実際に確認したところ、目録が空欄となる理由が見えてきた。第一の理由としてはこの資料群は入力No.(資料番号)に対応するアイテム数のばらつきが大きいことにある。入力No.(資料番号)1番号に対し、タブロイド紙1点のものもあれば、複数のまとまりをもち、100点以上のアイテムを持つ資料もある。先に述べたように、既存目録は組織資料のアイテム1点記述に関しては最低限の項目をそなえている。ところが「福原信三」資料に関しては、「資料のまとまり」を既存目録で表現しようとしていた。そのため空欄とせざるを得なかったと推察する。

次の理由として挙げられるのは、資料群に個人資料が含まれることである。組織資料であれば、本文中に表記されているタイトルと発行部門を記入するだけでよい。一方、個人資料にはタイトルや制作年が書き込まれているとは限らない。一見して目録に記入できるものはむしろ少数で、殆どが内容を手がかりに調査が必要となる〔41〕。しかし、そこまでの内容調査が行われた形跡はなかった。その結果、範囲がぼやけてしまった資料名と年代、作成者など基本的かつ重要な情報が空欄となり、資料の内容を捉えにくく、利便性の低い目録になってしまったと考えられる。

41 — 一例として、制作年と発行部門が空欄の「松江ヘルン旧居(小泉八雲 絵皿)」という資料を挙げる。陶器作品であったが、調査の結果、福原信三写真集にある「ヘルン旧居」を原画として、有田焼の老舗香蘭社が1936年に作成したものと分かった。しかし、調査には10分以上の時間がかかり、数秒で終わることもある組織資料の作業時間とは雲泥の差であった。

42 — ISAD(G) 3.1.5「記述単位の大きさと媒体(量、容積、または寸法)」の記述要素の多さはこれまでも指摘されている。松山龍彦「国際標準記録史料記述(ISAD(G))の小規模史料群への適用による編成記述の試み：好善社文書調査より」『GCAS report』vol.4, 2015年、42～62頁

43 — 「組織歴」「整理の体系」はファイル以上、「物的特徴と技術的要件」はアイテムレベルのみ、などレベルによって使用される項目に違いが見られた。また使用しなかった1項目は筆者が追加した「画像番号」である。写真撮影などのリンクが実現しなかったため項目使用に至らなかった。

2-4:資料調査方針について

上記で挙げた現状の問題点を解決すべく、筆者が立てた資料調査方針は以下の通りである。

- アイテムのように見える資料番号であるが、アイテムではなくファイル構造のものもある。そのためアイテムレベルまで内容調査を進める。(現状分析から段階的調査を適用した場合、概要調査は2009年時点で終わっているとみなされる。)
- 入力No.(資料番号)は重要な原秩序情報であり、安易に解体することはできない。調査した上でファイル名とアイテム名を分けて目録記述すること、新たに増えるアイテム記述は枝番を付して対応すること。
- 目録の項目は国際標準記録史料記述一般原則:ISAD(G)を採用し、使用項目は以下のとおりとする[表5]。採用していない項目は他の項目にも記述可能なこと、企業資料においては不要、もしくは優先度の低い項目と判断したものである。

そしてISAD(G)にはないが必要と判断した以下の項目を挿入してある。

- 数量 — 3.1.5 記述単位の大きさと媒体(量、容積、または寸法)に媒体を書き込んだ場合、数量を併記しづらい[42]ため、数量の記述は別項とした。
- 収蔵棚No. — 既存目録にもある項目で、物理的保管場所を示すため、必須。
- 画像番号 — 今後画像をリンクさせる可能性を考慮し追加した。

以上の調査方針に沿って、内容調査を行い、目録記述を試みた。次章にて調査結果と資料分析について述べ、第4章にてアーカイバル目録記述を試みる。

3 — 「福原信三」資料の分析

ここでは、資料調査から得られた結果とその一例を紹介し、資料群全体の構造を分析する。そこから浮かび上がる現在の文書資料編成における課題を指摘する。最後に信三の個人資料について分析する。

3-1:調査結果とその一例

内容調査の結果、当初65点とされていた資料が300点以上(雑誌類の複写物の点数を数えれば400点以上)に上った。既存目録では8項目であったものを22項目に増やしたが、結果的に使用した項目は21項目[43]である。内容・数量・来歴に加え、

表5 「福原信三」資料調査項目

3.1	個別情報のエリア	3.4	公開および利用条件のエリア
3.1.1	参照コード	3.4.1	利用可能性〔/公開〕を規定 〔/統制〕する条件
3.1.2	タイトル	3.4.2	複製を規定〔/統制〕する条件
3.1.3	年代	3.4.3	史料実体の言語/書体
3.1.4	記述レベル	3.4.4	物的特徴と技術的要件
3.1.5	記述単位の大きさと媒体 (量、容積、または寸法)	3.4.5	検索手段
3.2	コンテキストのエリア	3.5	関連資料のエリア
3.2.1	作成者名	3.5.1	オリジナル資料の有無
3.2.2	組織歴	3.5.2	複製の有無
3.2.3	伝来	3.5.3	関係する記述単位
3.2.4	取得あるいは譲渡の直接の源泉	3.5.4	出版についての注記
3.3	内容および構造のエリア	3.6	注記のエリア
3.3.1	範囲と内容	3.6.1	備考
3.3.2	評価・廃棄と日程計画の情報	3.7	記述管理のエリア
3.3.3	追加受入	3.7.1	アーキビストの注記
3.3.4	整理の体系	3.7.2	準拠規則類
		3.7.3	記述作成年月日

(取消し線の項目は今回採用していない項目)

44 — 本人の自筆原稿であるならば年代に無理がある、などの資料も元データに沿ったが、これにはさらなる調査が必要である。

表6 「福原信三伝 執筆文章 自筆原稿(091022026M)」

分類A	分類B	分類C	入力No.	資料名	制作年	発行部門	収蔵棚No.
歴史	創業・人物	福原信三	091022026M	福原信三伝 執筆文章、自筆原稿			L15C

それまで資料名として書かざるを得なかった出版情報なども項目で記述できるようになった。これによって飛躍的に情報量が増大した。その一例を次に紹介する。

「福原信三伝 執筆文章 自筆原稿」(資料番号091022026M)という資料は既存目録にて表6のように記述されていた。

資料調査の結果、この資料はアイテムではなく、ファイル(それもファイルボックス4箱に及ぶ)であった。資料のまとまり(袋単位)には企業資料館側でかつて作成した手書きの目録(メモ程度の付箋含む)が添付されていた。既存目録では小分類(分類C)以下の階層を作ることができず、資料内容のガイドとして作成されたと思われる。[写真1]この手書きの目録の情報なども参考にし、まとまりが認識できるものはサブファイルとし、それ以外は1点記述のままとした。内容調査の結果、表6で示した資料(資料番号091022026M)は表7のような構造を持つことが分かった。

サブファイル以下の階層は0～139の枝番号を付してアイテム記述を行った。手書きの添付目録の情報[44]や調査内容も目録に落とし込むことにより、資料群の情報量が十分に確保された。このファイル(091022026M)のサブファイル091022026M-0は後項にて内容に触れ、次章にてISAD(G)記述例(リスト型)を示す。

表7——ファイル091022026M「福原信三伝 執筆文章、自筆原稿」の内部構造

	資料番号	タイトル	年代	内容
ファイル	091022026M	福原信三伝 執筆文章、自筆原稿	1883～1992	福原信三の自筆原稿、書簡、出版物コピー、『福原信三』編集資料、信三関連展覧会資料139点
サブファイル	091022026M-0	福原信三 自筆原稿	1883～1941	ファイル091022026M内の主に福原原稿用紙に自筆で書かれた執筆原稿 091022026M-1～50 50点
サブファイル	091022026M-74	福原信三伝 来信ファイル	1965～1971	社用封筒の中に信三伝刊行に関する情報収集のためのやり取りをした葉書、書簡類(091022026M-75～138)が入っていた 63点
サブファイル	091022026M-139	写真芸術 アサヒカメラ その他信三執筆雑誌のコピー類93点	1924～1940	信三執筆文章掲載の『写真新報』『アサヒカメラ』『写真芸術』コピー類 93点
アイテム (その他1点もの)		上記サブファイル以外の各資料	1905～1992	信三関係資料、書簡類、『福原信三』編集刊行委員会あての書簡、信三に関する聞き取り調査類、信三没後の展覧会資料 24点

45——信三の弟で旧資生堂取締役福原信辰のこと。写真家としても活躍し、「福原路草」を名乗っていた。

46——信三の葬儀は資生堂と福原興業の合同社葬であった。資料の性質上、葬儀資料は福原家の関係資料と位置付けたが、企業資料としての側面も併せ持つことを付記しておく。

47——「近現代私文書の場合はその個人が作成したり個人あてに作成された文書の他に本人に直接関係しない文書や本人没後の文書なども含まれているケースも多く、そのような文書群の構成ならば「木戸孝允文書」ではなく「木戸孝允関係文書」とすべき、加藤聖文「アーカイブズの編成と記述：近現代史料をめぐる課題」、国文学研究資料館編『アーカイブズの科学』下巻、柏書房、2003年、221頁

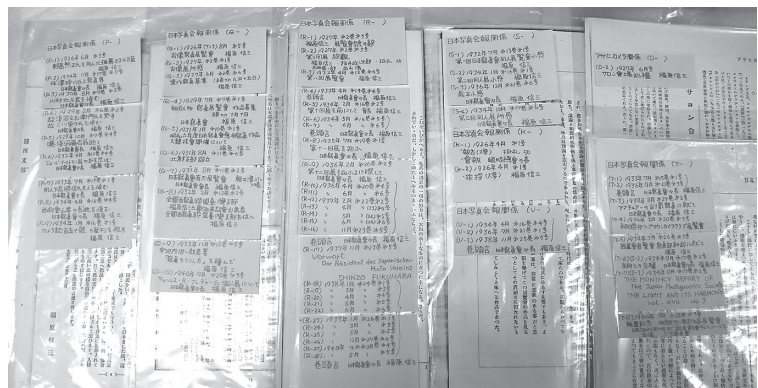


写真1——執筆記事コピー類

3-2：資料構造について

本項では「福原信三」資料全体の構造分析を行う。

この資料群は3つの性格の異なる資料が混在していた。それは信三本人やその家族が直接関係する個人資料、信三の活動時代ではない資生堂内部の組織資料、その他資料(信三に関する展覧会資料や雑誌記事など)である。

最初の個人資料の内容は自筆の原稿や書簡だけではなく、弟信辰(路草)[45]のノート、所有している不動産、本人没後の葬儀[46]関係の書類も含まれることから個人資料とその周辺(家および家族など)資料の複合体であると思われる。このことから個人資料部分は「福原信三関係資料」と称するのが適当であろう[47]。この「福原信三関係資料」は他の組織資料と混ざった形で保管されており、原秩序を見出すことができなかったがこの資料に関する来歴を考察してみたい。

資生堂は関東大震災(1922)と第二次世界大戦時の東京大空襲(1945)で

大きな被害を受けており[48]、社内の組織資料は非常に乏しい状態であった。戦後、最初に編纂された社史『資生堂社史－資生堂と銀座のあゆみ八十五年』(1957)のあとがきでは、資生堂に関する資料収集には大変な苦労があった、と述べられている[49]。このような会社の時代背景と、信三本人は1940年に社長を退いていることから「福原信三関係資料」は社内に蓄積していたのではなく、収集された可能性が高い。

2点目の組織資料は年代幅が1965年から1972年の資生堂組織資料群である。この資料を調査した際、先に述べた「福原信三関係資料」がなぜ社内是否存在するかの答えとなる資料があった。091023006M「福原信三 刊行委員会記録」(1965～1970)である。それによると『福原信三』編集刊行委員会[50]は1965年に福原信三の伝記を没後20年となる1968年に合わせて刊行すべく社内に立ち上げられた組織で[51]、『花椿』[52]編集部、社史編纂[53]関連のメンバーで構成されていた。編集作業は、(1)信三にまつわる資料を収集し、(2)本人を直接知る関係者にインタビューをした結果と(1)の資料を元に、(3)執筆者が原稿を書く、という流れであった。実際、資料群の中には信三と交流のあった関係者50名以上に行ったインタビュー結果[54]も残されている。

つまりこの資料群の一部の来歴は伝記『福原信三』編纂のために収集された、『福原信三』編集刊行委員会資料といえるものであり、個人資料を含む組織資料であった。それは①福原信三関係資料(1905～1941頃)と②『福原信三』編集資料(1965～1972)から成る。

最後に、伝記編纂とは別の目的を持つ③その他資料(信三を対象とした展覧会、研究、雑誌記事など)(1970～2000)が存在する。年代幅から①②の伝記刊行事業が終了したのちも蓄積され続けていた資料群である。この③その他資料については後に分析する。

ここで「福原信三」資料の内容を整理する。

- ①福原信三関係資料(1905～1941頃) — 本人の著述原稿、スクラップブックなどの個人資料、書簡類、福原家に関する資料。『福原信三』編集刊行委員会によって収集された。
- ②『福原信三』編集資料(1965～1972) — 伝記『福原信三』(1970)の編集刊行委員会資料。編集会議議事録、編集・執筆資料などの業務資料と聞き取りインタビューや本人の執筆記事のコピー類などの調査収集資料類。
- ③その他資料(展覧会、雑誌などの二次使用類)(1970～2000) — 福原信三遺作展(編集委員会、1970)から始まる信三を対象とした回顧展、展覧会、研究、新聞雑誌記事など。

次に資料構造を図2に示す。今後、記述にも関わるため、「福原信三」資料の

48 — 関東大震災(1922)では銀座にある2つの店舗、工場、倉庫のすべてが焼失。また、第二次世界大戦、東京大空襲(1945)では東京第四工場と化学研究所が被災した。(矢部信壽「大阪の資生堂歴史と発展」資生堂、求龍堂1989年)

49 — 「肝腎な資生堂に関する資料は、関東大震災と太平洋戦争の戦禍との二度の被災により、その大半を亡失しており、資料収集上の労苦は想像のほかであった。併い、各方面のご理解あるご援助とご協力により、幾多の貴重な資料のご提供を受け、また既刊の図書を参考にさせていただいた」前掲34、670～671頁

50 — この組織名称は資料上「福原信三伝編集委員会」「信三伝編集委員会」「編集刊行委員会」と統一が見られないため、ここでは「福原信三編集刊行委員会」に統一する。

51 — 実際の『福原信三』は1970年刊行である。

52 — 資生堂発行の企業文化誌。化粧品愛用者顧客向けに1924年に「資生堂月報」として始まり、「資生堂グラフ」を経て1937年に「花椿」として創刊。現在はWEB版と紙での季刊発行によるクロスメディアで展開している。

53 — 同時期に『資生堂百年史』(資生堂、1972年)も編纂されていた。

54 — 美術評論家の黒田鵬心、画家の梅原龍三郎、川島理一郎へのインタビューがされたことも今回明らかとなった。

コードをここでは「F」とし、通し番号を振ってある。

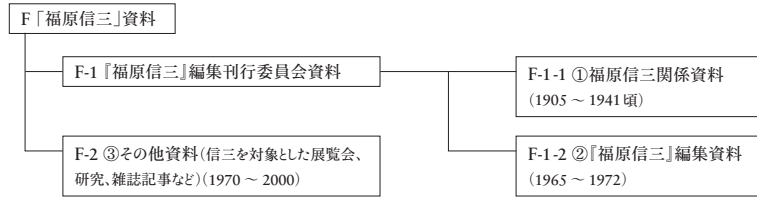


図2 — 「福原信三」資料の内部構造

「福原信三」資料群の全体構成が見えたところで、①と③の資料について、その蓄積状況を考察しておきたい。

まず、本来の個人資料の部分である「①福原信三関係資料」の構造分析を試みた。しかし、資料群のまとまりがあいまいな上、編集刊行委員会が収集した他の資料と混ざっていると考えられた。たとえば本人自筆の原稿類に信三が差出人となる葉書(つまり、信三の手元にあるはずのないもの)がまとめられている状況などである。このことは、『福原信三』編集刊行委員会が伝記編纂の目的の元に資料収集したことを裏付けるものであり、原秩序は失われていると判断される。個人資料の事例として想定される結果であった[55]。とはいえ、伝記編纂を機に個人資料が収集され、その散逸を防ぐことができた一事例と捉えることができるだろう。

次に、『福原信三』編集刊行委員会資料とは性格の違う③その他資料が「福原信三」資料に蓄積した理由を考察しておきたい。この資料群のはじまりは「福原信三遺作展 案内状」(編集委員会、1970)である。「福原信三遺作展」(資生堂ギャラリー、1970)は伝記『福原信三』刊行に合わせて行われたイベントであった。編集委員会が関わった業務のため、この案内状も『福原信三』編集刊行委員会資料と一緒に保管されていたと考えられる。業務の流れから考えれば、伝記発行と遺作展が終了し、1972年頃に伝記編集委員会が解散した段階で資料群も閉じられるのが自然である。ところが③その他資料のみ、閉じられずに資料の蓄積が続いた。その理由として考えられるのは「福原信三」資料という名称である。この資料群は信三の伝記編纂事業によって蓄積が始まった。そのことを考え合わせると、資料名の「福原信三」は個人名ではなく、信三の伝記『福原信三』を意味していたのではないだろうか。ところが、関係者以外からはその名称から信三を主題(テーマ)とした資料群という印象が生まれてしまったと推察する。この資料群に、より現実に即した「『福原信三』編集刊行委員会資料」などのタイトルが付けられていたならば、閉じられたシリーズとして完結した。そして③その他資料は「信三関連展示資料」など、他のシリーズ名での蓄積となったと考える。③その他資料群の最終年代は2000年である。しかし信三を

題材とする展覧会や貸出業務は2000年以降も続いており、それらの資料は「A文化＞B企業文化部」に蓄積されている。同種の事業が2000年を境に別シリーズに蓄積されているのである。このことをふまえ、文書資料編成における課題を次項で述べる。

3-3: 現在の文書編成における課題

企業資料館の文書分類は、概ね資生堂の組織機能に即した編成(具体的には図1で示したように、大分類における「経営」「生産」などである)となっている。その中において個人名のシリーズが、純粹な個人資料群であるならば問題はない。ところが「福原信三」資料の実態は個人資料、組織資料、そして外部資料で成り立っている。個人資料以外のものは組織機能で言えば、「刊行物編集」であり、「展示業務」や「資料貸出(二次使用)記録」というカテゴリに分類されるべきものである。では信三を主題にした資料群という位置づけかと言えばそうではない。信三に関する資料は「福原信三」以外の文書資料にも存在するからである^[56]。文書資料内の「A文化＞B企業文化部」や「A販売＞Bグローバル」では資生堂ギャラリーその他で開催した信三に関する展覧会資料や資料の貸出記録が50点近く存在する。また、前項でも触れたように、2000年を境に信三関連業務資料は「A歴史＞B創業・人物＞C福原信三」資料ではなく、主として「A文化＞B企業文化部」での蓄積に変わっている。その理由を考察する。

企業文化部の開設は1990年、企業資料館の開館は1992年である。このころから信三関連業務は企業文化部が担当している^[57]。そのため、同業務の蓄積は「福原信三」から「B企業文化部」へ移行した。そして「福原信三」資料の③その他資料はひそかに閉じられたと推測する。そのため、信三関連業務が別分類で存在する事になってしまった。ここでさらに問題となるのが、同一業務(展覧会)に関する資料が「福原信三」資料と上記の別シリーズに分かれて存在する点である。1992年に東京で行われた写真展^[58]の資料は「C福原信三」資料と文書資料「A文化＞B企業文化部」の両方に存在し、2000年にニューヨークで開催された写真展^[59]資料は「福原信三」資料と文書資料「A販売＞Bグローバル」の両方に存在する。ニューヨークにおける展覧会は窓口が海外支社であったため、「A販売＞Bグローバル」での蓄積となったことと推察する。このように、担当部門に引き寄せられる形で資料の蓄積がなされた形跡がある。資料の内容からも分類先を分ける理由が見当たらなかった。企業資料館の分類設定において、このようにぶれが生じる状況は、現在の文書資料編成に改善の余地があることを示している。この「福原信三」関連資料が多シリーズにまたがるという課題を次章のISAD(G)、ISAAR(CPR)記述の関連項目に記載することで解決の一助としたい。

56 — 文書資料以外で「福原信三」を主題とした分類は写真資料(旧役員作品)にも、図書資料にも存在する。その場合は、写真資料の場合作家としての分類であり、図書資料における主題分類であるため、運用上は全く問題ない。

57 — 「企業文化部」資料から、1992年の展覧会(「美しい光の流るる處 信三・路草写真展1913～1941」展、ワタリウム美術館、東京、1992)以降、信三関連事業は企業文化部が担当している。

58 — 前掲57

59 — “Shinzo and Roso Fukuhara” New York: Sepia International, 2000.

60 — 資生堂編『銀座』(1921)は、与謝野晶子、北原白秋など当時の作家、ジャーナリスト約50名が寄稿しており、大正時代の銀座文献として価値が高いとされる。矢部、前掲20、134頁

61 — 『銀座』には銀座の柳撤去に反対する京新連合会(現在の銀座連合会の前身)の嘆願書と東京市の回答を載せている。それが発刊の大きな目的であったとされる。矢部、前掲20、134頁

62 — 戸矢理衣奈は「新橋資生堂」から「東京銀座資生堂」への変化は書籍『銀座』(資生堂、1921)の発行と軌を一にすると指摘する。(戸矢理衣奈「東京銀座資生堂」の誕生 — 福原信三と銀座イメージの構築」『日本研究』38、国際日本文化研究センター、2008年)

63 — 前掲34、670頁

64 — 近年、松本の遺族から企業資料館に寄贈された松本昇の個人資料群(約216点)である。

3-4: 個人資料の分析

ここでは個人資料部分である「福原信三関係資料」の内容について分析する。この個人資料群は原秩序が失われており、伝記編集という目的に沿って収集されたものである。そのため必ずしも信三個人の活動を網羅的に反映するものではないが、個人資料の断片から本人の活動を分析したい。

この資料群の大きな特徴は、信三の言論活動に関する資料(写真、芸術、広告についての論文類や写真雑誌への執筆記事など)の多さで、約300点中79点が著述関係の資料(自筆、複写含む)であった。化粧品や香水など社業に関連するもの、写真に関する執筆(数量的には最も多い)、その他さまざまな話題の随筆も含む(次章表10参照)。寄稿先は新聞、雑誌類で、言論活動を通じた信三の社会的な交流も伺える。

彼の自筆原稿には「銀座」に関する執筆が10点あった。信三は資生堂編集『銀座』(1921)[60]を発刊しているが、今回の自筆原稿には『銀座』原稿も2点含まれていた。銀座の街並みや都市計画に関して積極的に発言し[61]、関わっていく姿勢がみられる。信三は香水「銀座」(1925)や「銀座化粧品」(1931)をプロデュースしており、自身が生まれ育った銀座に思い入れがあった。そのことは後の資生堂にも影響している。福原有信時代の資生堂は「新橋資生堂」を名乗っていたが、信三時代に「東京銀座資生堂」とし[62]、そのキャッチフレーズは近年まで使用されていた。社史『資生堂社史 - 資生堂と銀座のあゆみ八十五年』(1957)においても、「資生堂の歴史から銀座を切り離すことはできない」として、社史を銀座の歴史と共に記述している[63]。資生堂は2006年に本社機能を港区東新橋(汐留)に移したが、登記上の所在地は中央区銀座のままである。「銀座(ギンザ)」という名称は信三の現役時代から現在に至るまで資生堂の商品名、店名、ビル名などさまざまに使用されている。以上のような本人の自筆原稿に関する目録は次章のISAD(G)記述で引用する。

それでは、この「福原信三関係資料」には経営者関係資料としての組織資料は含まれているのであろうか。資料調査に入る際、この個人資料群には同時代の経営資料や組織資料も含まれるのではと予想されていたが、実はこの資料群には資生堂の組織文書は含まれていなかった。社業との直接的な関わりを示す資料は「販売組織に関する一断片(組織的販売に関する所感より)」(1929)などの自筆原稿数点と掲載原稿コピー類であるが、それらは社内資料ではなく、本人の著述関係資料であった。

これと対照的な資料群として、2-1でも紹介した2代目社長、松本昇関係資料[64](以下松本資料)がある。松本のニューヨーク大学同窓会名簿や愛用のカメラなどの個人資料も含まれるが、資料群の大半は専務時代から社長時代にかけての社内資料(主に経営方針などの経営実務資料)であり、その数量は全体の7

割に上る。さらに、この資料群には信三社長時代(松本の専務時代)の組織資料が14点[65]確認された。内容は年度方針、講演原稿、会議関係記録、欧米視察記録などであった。このことは、経営の実務的なことは松本が執り行っていたとの表れとみることができ。信三の個人資料は資生堂資料と同じく被災しているか、収集される過程で失われた可能性はあるものの、現存する2人の個人資料群における組織資料の差は特徴的である。個人資料の比較において資生堂における役割分担が明確にあったことを逆説的に示しているものと考え。信三は製品の開発製造、意匠広告、銀座の店(化粧品部)を自分の担当と決めていた[66]。その役割は「流行を考えねばならぬ立場」[67]であり、「商品の芸術化」[68]を目指すものであった。何事においても芸術性を求める彼の思想は写真、化粧品製造、広告においても一貫している。信三は経営実務を松本に任せる[69]ことによって自分の理念、思想を深めることに集中し、著述活動を通して社内外に発信した。信三の自筆原稿類にはそのような彼の思索の痕跡が残されている。「福原信三関係資料」は信三の経営態度も示しているのである。

以上のことから、この個人資料群は、信三が企業と社会の中間地点で社会と交流し、社会に発信する個人活動の軌跡であると同時に、資生堂にとっては企業理念の源泉であり、当時の経営の側面を示す資料群として位置付けることができよう。

4 — 国際標準適用によるアーカイバル記述の試み

本章では、既存目録の分析と実際の資料調査によって明らかとなった「福原信三」資料の構造を表現すること、信三関連資料が多シリーズにまたがるという課題を解決するために、ISAD(G)とISAAR(CPF)によるアーカイバル記述を試みる。

4-1: 既存目録の再検討

国際標準適用によるアーカイバル記述を試みる前に、これまで述べてきた課題を既存目録で解決できるか検討してみたい。

既存目録に関しては、2-3で分析したようにISAD(G)の必須項目にはほぼ近い項目をそなえているものの、アイテム記述をするための最小限度の項目であった。そのため資料のまとまりや多様な形態(媒体)の個人資料を表現するには項目が足りなかった。この点について、解決の選択肢は2つあると考える。1点目は資料のまとまりや内容を記述できるように既存目録の項目を増やす選択肢である。「記述単位の大きさと媒体(量、容積、または寸法)」を追加すればISAD(G)の

65 — 「福原信三」資料も既存項目の空欄が目立ったが、それと同様に、松本資料の目録も216点中、77点の作成年代が空欄であった。今回目録上確認できた、信三社長時代の組織資料は14点であったが、さらに丁寧な調査が必要と考える。

66 — 矢部、前掲20、113頁

67 — 1920年『新演芸』(1916年創刊、1925年4月廃刊の演劇雑誌)の資生堂化粧品部の掲載広告の一文。「私たちは今、景気不景気を考えるより、流行を考えねばならぬ立場にあります。そして、どうかして何か新しいものを生み出して、流行界に多少の貢献をしたいと思っております」

68 — 安成三郎(作家かつ福原信三の私設秘書)『資生堂略史』(資生堂、1931年)には「商品の藝術化」という章がある。

69 — 1917年に信三が松本を支配人として招いて以来、信三は松本に任せたことには口を出さなかったと言われている。矢部、前掲20、113頁

70 — 国際標準記録史料記述一般原則 (General International Standard Archival Description):ISAD(G) は1994年に国際アーカイブズ評議会:ICAによって定められたアーカイブズに関する記述標準である。1999年には改訂版としてISAD(G)第2版が出された。

71 — ただし、記述内容は筆者が資料調査を元に記入したものであり、株式会社資生堂および資生堂企業資料館の公式見解でないことを述べておきたい。

72 — 階層が存在しなければ記述できないものではなく、フォンドの直下にアイテムが位置付いていても記述可能であり、この柔軟性がマルチレベル記述の大きな特徴である。

73 — 企業資料館の資料分類では文書資料と同列に媒体別のグループが存在する(写真、図書、宣伝制作資料など)。そのため、フォンドの下には文書資料を示すために(グループ)という階層を含めることにした。また、サブフォンド、サブサブフォンドは企業資料館の文書資料大分類、中分類をそのまま当てはめているがこの編成が適当かどうかは今後の課題としたい。

必須項目には達する。また、「範囲と内容」「備考」という項目追加でも資料情報は補強できる。2点目は「福原信三」の階層を分類Aの上位に上げるなどして、分類Cには他の組織資料同様、アイテム記述のレベルとする。階層の変更が難しくればさらなる細分類(D,E)を設けても良い。

どちらの選択肢を取った場合でも課題は残る。アイテム記述に細分化する過程で資料の原秩序が失われる可能性である。既存目録の分類は、タグ付けに近いものであり、資料のまとまりを示すためのものではない。「福原信三」資料における資料番号の多くがファイルレベルであったが、上記の方法ではファイル単位の姿が失われてしまうのである。もう1点は前章で指摘した、福原信三関連資料が多シリーズにまたがるという課題は解決しない点である。関連資料情報をアイテム記述の備考などを使い、相互に記述する事は可能である。しかし、福原信三を主題とする資料群をまとまりとして説明する方法がないのである。

これらの課題をふまえて、国際標準適用のアーカイバル記述を試みる。

4-2: ISAD(G)^[70]による「福原信三」資料記述^[71](リスト式と記述式)

国際標準記録史料記述一般原則: ISAD(G)記述の特徴は第一に資料群としての全体像と階層が視覚化されるマルチレベル記述^[72]にある。第二に資料に関する情報を網羅的に記載することが出来るため、資料情報の充実を図ることができる。その結果、資料群の理解や検索に大きな利便性を与えることが期待される。

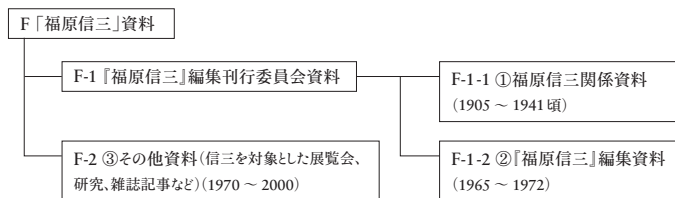
「福原信三」資料を資生堂企業資料全体から見た階層^[73]と、表9、表10における記述範囲の関係性を表8に示す。新目録における参照コードは、前章で示した資料構造を示すコードを使用し、ファイル以下については規存目録の資料番号との組み合わせで示すものとする。

表8 — 資料群全体から見た記述階層

	記述レベル	参照コード(資料番号)	資料名
	フォンド	-	資生堂企業資料
	(グループ)	-	文書資料
	サブフォンド	-	歴史(大分類)
	サブサブフォンド	-	歴史・人物(中分類)
表9記述	シリーズ	F	「福原信三」資料(小分類)
	サブシリーズ	F-1	『福原信三』編集刊行委員会資料
	サブシリーズ	F-2	その他資料
	ファイル	F-1-2 (091023005M)	福原信三伝 編集刊行資料
表10記述	サブファイル	F-1-1 (091022026M-0) における自筆原稿部分	「福原信三伝 執筆文章、自筆原稿(091022026M)」

表9— F「福原信三」シリーズにおけるISAD(G)記述(記述式)

〈シリーズレベル〉	
3.1.1 参照コード	F
3.1.2 タイトル	福原信三
3.1.3 年代	1905～
3.1.4 記述レベル	シリーズ
3.1.5 記述単位の大きさと媒体(量、容積、または寸法)	文書資料、原稿(コピー含む)、書簡類、写真、陶器
— 数量	ファイルボックス26箱
3.2.1 作成者名	福原信三、「福原信三」編集刊行委員会ほか
3.2.2 組織歴または履歴	『福原信三』編集刊行委員会:1965年に組織され、1970年解散ののち社史編集室へ吸収(仮)
— 収蔵棚No.	L15C
3.3.1 範囲と内容	『福原信三』編集刊行委員会が編集した福原信三に関する伝記(矢部信壽『福原信三』資生堂、1970)に関する資料(福原信三関係資料含む)及び、その他資料(福原信三に関する展覧会、回顧展等のカタログ、書類等)
3.3.3 追加受入	あり
3.3.4 編成	編成は以下の通り



3.4.1 アクセス管理する条件	一部非公開
3.5.3 関連資料	福原信三に関する展覧会及び貸出業務は文書資料 A文化>B企業文化部にも収蔵あり
3.5.4 出版書誌情報	矢部信壽『福原信三』資生堂(1970)
〈サブシリーズレベル〉	
3.1.1 参照コード	F-1
3.1.2 タイトル	『福原信三伝』編集刊行委員会資料
3.1.3 年代	1905～1972
3.1.4 記述レベル	サブシリーズ
3.2.1 作成者名	福原信三、福原信三伝編集委員会ほか
3.3.3 追加受入	閉じられた組織のためなし
3.3.4 編成	2つのサブサブシリーズを含む F-1-1 福原信三関係資料 F-1-2 「福原信三」編集資料"
〈サブシリーズレベル〉	
3.1.1 参照コード	F-2
3.1.2 タイトル	その他資料(信三を対象とした展覧会、研究、雑誌記事など)
3.1.3 年代	1970～2000
3.1.4 記述レベル	サブシリーズ
3.2.1 作成者名	ベントックスギャラリー、ワタリウム美術館ほか
3.5.3 関連資料	『美しい光の流るる處 信三路草写真展1913～1941』展(ワタリウム美術館、東京、1992)関連資料は文書資料 A文化>B企業文化部>C企業資料館にも収蔵あり "Shinzo and Roso Fukuhara" New York: Sepia International, 2000. 関連資料は文書資料 A販売>Bグローバル>C企画展にも収蔵あり
〈ファイルレベル〉	
3.1.1 参照コード(資料番号)	F-1-2(091023005M)
3.1.2 タイトル	福原信三伝 編集刊行資料
3.1.3 年代	1966～1972
3.1.4 記述レベル	ファイル
3.1.5 記述単位の大きさと媒体(量、容積、または寸法)	バインダー
— 数量	1冊
3.2.1 作成者名	福原信三伝編集委員会
3.3.1 範囲と内容	インタビュー依頼原稿 校正依頼原稿 お礼状 新刊紹介記事スクラップ

表10 ― 「福原信三資料 ISAD (G)記述」(リスト型) 0901022026 M-0 の福原信三の自筆原稿部分(空欄の行は非表示)

3.1.4 記述レベル	3.1.1 参照コード (資料番号)	3.1.2 タイトル	3.1.3 年代	3.1.5 記述単位の大きさや媒体 (量、容積、または寸法)
サブファイル	F-1-1 (091022026 M-0)	福原信三 自筆原稿	1883 ~ 1941	ファイル 091022026 M 内の主に福原原稿用紙に自筆で書かれた執筆原稿 091022026 M-1 ~ 50
アイテム	F-1-1 (091022026 M-1)	福澤全集第十巻 売葉論	1883	福原原稿用紙(自筆)
アイテム	F-1-1 (091022026 M-2)	福澤全集第十巻 通俗売葉論 通俗医術論	1883	福原原稿用紙(自筆)
アイテム	F-1-1 (091022026 M-3)	福澤全集第十巻 学者と町人	1886	福原原稿用紙(自筆)
アイテム	F-1-1 (091022026 M-4)	福澤全集第十巻 医業分業行われ難し	1891	福原原稿用紙(自筆)
アイテム	F-1-1 (091022026 M-5)	「銀座」の編纂について	1921	福原原稿用紙(自筆)
アイテム	F-1-1 (091022026 M-6)	(私は銀座で生まれましたもので)	1921	福原原稿用紙(自筆)
アイテム	F-1-1 (091022026 M-7)	復興したい新築屋 アパートメントとアーケード	1924	福原原稿用紙(自筆)
アイテム	F-1-1 (091022026 M-8)	銀座の新装	1925	福原原稿用紙(自筆)
アイテム	F-1-1 (091022026 M-9)	川島理一郎君の事	1925	福原原稿用紙(自筆)
アイテム	F-1-1 (091022026 M-10)	写真の芸術上の考察	1925	福原原稿用紙(自筆)
アイテム	F-1-1 (091022026 M-11)	写真芸術1年の回顧	1925 ~ 26	福原原稿用紙(自筆)
アイテム	F-1-1 (091022026 M-12)	魂の検査	1926	福原原稿用紙(自筆)
アイテム	F-1-1 (091022026 M-13)	大自然への同化	1926	福原原稿用紙(自筆)
アイテム	F-1-1 (091022026 M-14)	自然にかえるべきか	1927	福原原稿用紙(自筆)
アイテム	F-1-1 (091022026 M-15)	印画面上の自然	1927	福原原稿用紙(自筆)
アイテム	F-1-1 (091022026 M-16)	香水 匂いと香料	1927	福原原稿用紙(自筆)
アイテム	F-1-1 (091022026 M-17)	外国での新年の思い出	1928	福原原稿用紙(自筆)
アイテム	F-1-1 (091022026 M-18)	光と其の諧調の義解	1929	福原原稿用紙(自筆)
アイテム	F-1-1 (091022026 M-19)	天稟か汗か	1929	福原原稿用紙(自筆)
アイテム	F-1-1 (091022026 M-20)	化粧品品の容器の材質及び形状の最近の傾向	1929	福原原稿用紙(自筆)
アイテム	F-1-1 (091022026 M-21)	銀座の追憶(1930年加筆)	1929	福原原稿用紙(自筆)
アイテム	F-1-1 (091022026 M-22)	世界的な銀座の夜店	1931	福原原稿用紙(自筆)
アイテム	F-1-1 (091022026 M-23)	立体化した銀座	1931	福原原稿用紙(自筆)
アイテム	F-1-1 (091022026 M-24)	飛騨高山の旅から	1932	福原原稿用紙(自筆)
アイテム	F-1-1 (091022026 M-25)	ジョージ・イーストマン翁を悼む	1932	福原原稿用紙(自筆)
アイテム	F-1-1 (091022026 M-26)	きょうの話題 ソーダ・ファンテン	1933	書起こし原稿
アイテム	F-1-1 (091022026 M-27)	販売組織に関する一断片(組織的販売に関する所感より)	1929	福原原稿用紙(自筆)
アイテム	F-1-1 (091022026 M-28)	香水雑話	1933	福原原稿用紙(自筆)
アイテム	F-1-1 (091022026 M-29)	涼しい話	1933	福原原稿用紙(自筆)
アイテム	F-1-1 (091022026 M-30)	温泉地を主として伊豆に対する雑感	1936	福原原稿用紙(自筆)
アイテム	F-1-1 (091022026 M-31)	小村君を憶う	1936	福原原稿用紙(自筆)
アイテム	F-1-1 (091022026 M-32)	高木量君を悼む	1937	福原原稿用紙(自筆)
アイテム	F-1-1 (091022026 M-33)	伊東月葉〇〇俳句作法序文	1937	書籍
アイテム	F-1-1 (091022026 M-34)	銀座随想	1940	福原原稿用紙(自筆)
アイテム	F-1-1 (091022026 M-35)	現在の銀座に対する感想	1940	福原原稿用紙(自筆)
アイテム	F-1-1 (091022026 M-36)	銀座随想	1940	福原原稿用紙(自筆)
アイテム	F-1-1 (091022026 M-37)	水に因んみて	1940	福原原稿用紙(自筆)
アイテム	F-1-1 (091022026 M-38)	日本の美しさを語る	1941	福原原稿用紙(自筆)
アイテム	F-1-1 (091022026 M-39)	新春所感(正月に修善寺に行った)	(1925 ~ 26)	福原原稿用紙(自筆)
アイテム	F-1-1 (091022026 M-40)	学問のすすめ 初編 福澤全集第三巻	(明治前半)	福原原稿用紙(自筆)
アイテム	F-1-1 (091022026 M-41)	人は同等なる事 学問のすすめ二編	(明治前半)	福原原稿用紙(自筆)
アイテム	F-1-1 (091022026 M-42)	福澤全集第一巻 西洋事情外編 卷三 私有の本を論ず	(明治前半)	福原原稿用紙(自筆)
アイテム	F-1-1 (091022026 M-43)	福澤全集第一巻 西洋事情二編 卷一	(明治前半)	福原原稿用紙(自筆)
アイテム	F-1-1 (091022026 M-44)	福澤全集第一巻 福澤全集 緒言	(明治前半)	福原原稿用紙(自筆)
アイテム	F-1-1 (091022026 M-45)	福澤全集第一巻 福澤全集 緒言	(明治前半)	福原原稿用紙(自筆)
アイテム	F-1-1 (091022026 M-46)	第3章 倭約の事 第4章 正直の事 第5章 勉強の事	(明治前半)	福原原稿用紙(自筆)
アイテム	F-1-1 (091022026 M-47)	香水銀座	不明	福原原稿用紙(自筆)
アイテム	F-1-1 (091022026 M-48)	(昨年の夏ふとしたことから)	(1939 ~ 1941)	福原原稿用紙(自筆)
アイテム	F-1-1 (091022026 M-49)	(人〇はものを見て感じたこと)		福原原稿用紙(自筆)
アイテム	F-1-1 (091022026 M-50)	(赤外線、ライカ的に解決すべきか)	(1925 ~ 1935)	福原原稿用紙(自筆)

数量	3.2.1 作成者名	収蔵棚No.	3.4.2 複製を規定 〔統制〕する条件	3.5.4 出版についての注記	3.6.1 備考
50点	福原信三	L15C	原		
13枚	福原信三?	L15C	原		現物未確認
8枚	福原信三?	L15C	原		現物未確認
17枚	福原信三?	L15C	原		現物未確認
11枚	福原信三?	L15C	原		現物未確認
13枚	福原信三	L15C	原	『銀座』1921年10月	
11枚	福原信三	L15C	原	『銀座』1921年10月	
15枚	福原信三	L15C	原	『東京日日新聞』1924年10/161727	
7枚	福原信三	L15C	原	『銀座』創刊号1925年5月	
20枚	福原信三	L15C	原	『アトリエ』第2巻9号	
20枚	福原信三	L15C	原	『龍門雑誌』第437号	
11枚	福原信三	L15C	原	『日本写真年鑑』大正14～15	
10枚	福原信三	L15C	原	『アサヒカメラ』1926年8月号	
9枚	福原信三	L15C	原	『アサヒカメラ』1926年9月号	
8枚	福原信三	L15C	原	『アサヒカメラ』1927年3ノ6	
7枚	福原信三	L15C	原	『アサヒカメラ』1927年4ノ5	
16枚	福原信三	L15C	原	『御婦人手帳』	
8枚	福原信三	L15C	原		
8枚	福原信三	L15C	原	『日本写真会 会報』	
9枚	福原信三	L15C	原	『アサヒカメラ』第7巻6月号	
11枚	福原信三	L15C	原	『帝京工芸』第3巻第5号	
7枚	福原信三	L15C	原	『帝劇』12号	
20枚	福原信三	L15C	原	『講演』第144 東京日日新聞主催「東京行進曲」	
5枚	福原信三	L15C	原	『文芸春秋』第9巻8月号	
8枚	福原信三	L15C	原	『日本写真会 会報』1932年8月号	
3枚	福原信三	L15C	原	『日本写真会 会報』1932年4月号	
4枚	福原信三	L15C	原	『時事新報』大東京版 「市民のニュース」1933年8/1欄	時事新報からの書き起こし 原稿。信三自筆ではない。 未完
	福原信三	L15C	原	『三田広告研究』第7号	
11枚	福原信三	L15C	原	「セルパン」第7号	
4枚	福原信三	L15C	原	『日本写真会 会報』1933年8月号	
5枚	福原信三	L15C	原	『風景』1936年3/1発行	
2枚	福原信三	L15C	原		
2枚	福原信三	L15C	原		
4枚	福原信三	L15C	原		
6枚	福原信三	L15C	原	『都市風景』2ノ2	
1枚	福原信三	L15C	原	『都市風景』2ノ2兼回答	
6枚	福原信三	L15C	原	『経済マガジン』1940年6月号随筆欄	
11枚	福原信三	L15C	原	『サンデー毎日』19巻	
	福原信三	L15C	原		
4枚	福原信三	L15C	原		
8枚	福原信三	L15C	原		
9枚	福原信三	L15C	原		
3枚	福原信三	L15C	原		
3枚	福原信三	L15C	原		
7枚	福原信三	L15C	原		
18枚	福原信三	L15C	原		
4枚	福原信三	L15C	原		商品能書用?
11枚	福原信三	L15C	原		
15枚	福原信三	L15C	原		
56枚	福原信三	L15C	原		

表11—「福原信三」ISAAR(CPF)記述

5.1 識別領域	
5.1.1 作成者種別	個人/P2
5.1.2 名前	福原信三 FUKUHARA, Shinzo(1883-1948)
5.2 記述領域	
5.2.1 存続(生存)年月日	1883年7月25日～1948年11月4日
5.2.2 来歴	明治16年(1883)東京府京橋区出雲町(現中央区銀座)に資生堂創業者の福原有信(P1)の三男として誕生。泰明小学校卒業。12歳で日本画を、13歳で洋画と写真始める。14歳でアマチュア写真クラブ「東洋写真クラブ」に入会し、最年少(15歳)で入賞。正則中学卒業、千葉医学専門学校(現千葉大学医学部)、コロンビア大学薬学部卒業。1915年に資生堂を引き継ぎ、商標「花椿マーク」を制定。大正5年(1916)年意匠部(現宣伝デザイン部)と試験室(現リサーチセンター)を発足させる。大正8年(1919)資生堂画廊(現企業文化部 資生堂ギャラリー)開廊。大正11年(1921)年弟信辰(路草)らとともに「寫真藝術社」を結成。同年「銀座」(資生堂)刊行。大正13年(1924)「日本写真会」設立、初代会長に就任。昭和2年(1927)に資生堂を株式会社化し、初代社長に就任する。昭和15年(1940)に社長を引退し、会長就任。戦時中は信州豊科村に疎開。昭和23年(1948)11月4日逝去。
5.2.3 場所	京橋、銀座、ニューヨーク、ボストン、長野豊科村
5.2.4 組織	資生堂、福原合名会社(現福原興業) 帝国生命保険会社、寫真藝術社、日本写真会
5.2.5 機能・肩書	資生堂取締役社長、福原合名会社代表社員→福原興業取締役社長、帝国生命保険会社取締役、日本写真会会長
5.2.7 内部構造・系図	父:有信(P1) 母:徳 妻:よ 養子:由紀夫 兄弟姉妹 <ul style="list-style-type: none"> ●とり(館山病院長川名博夫妻) ●信一(資生堂7代目社長の福原信和父) ●淑江(キッコーマン7代目社長の茂木佐平治妻) ●信三(資生堂初代社長) ●信(三井生命保険社長野依辰治妻) ●ゆう(日本車輛常務天野七三郎妻) ●信辰(資生堂副会長、写真家、路草の別名も) ●美枝(渋沢栄一の二男、石川島飛行機製作所社長渋沢武之助妻) ●信義(資生堂会長、資生堂10代目社長の福原義春父) 甥 <ul style="list-style-type: none"> ●福原信和(資生堂7代目社長) ●福原義春(資生堂10代目社長)
5.2.8 文脈、背景	福原信三は生来、美術、写真を好んだが、父、福原有信から「資生堂」の経営を任されたのちはその才能を資生堂経営にも生かした。薬局が主であった資生堂経営を化粧品主体に切り替え、花椿マークの制定、意匠部、試験室、資生堂画廊を新設し、新しい資生堂のイメージを醸成することに尽力した。資生堂化粧品部の陳列室としてスタートした資生堂画廊だが、最初の展示は洋画家川島理一郎の個展だった。新進気鋭のアーティストで、まだ評価の定まっていない新人に展示会場を提供するという、ノボロ的役割も果たしていた。芸術文化のもう一つの文脈として写真家としての顔がある。弟信辰(路草)と共に「光と其諧調」という運動、日本写真会の設立など近代写真の牽引役として活躍した。
5.3 関連領域	
関連1	
5.3.1 関連する個人、団体の名称	資生堂 Shiseido
5.3.2 種類	組織
5.3.3 関係性	代表
5.3.4 期間	1915～1940
関連2	
5.3.1 関連する個人、団体の名称	日本写真会
5.3.2 種類	組織
5.3.3 関係性	会長
5.3.4 期間	1924～1948
関連3	
5.3.1 関連する個人、団体の名称	川島理一郎
5.3.2 種類	個人
5.3.3 関係性	友人→上司(意匠部部員)
5.3.4 期間	1908～1948
5.4 管理領域	
5.4.1 資料情報	日本、資生堂企業資料館、 文書資料 A歴史>B創業・人物>C[福原信三/F] A販売>Bグローバル>C企画展 A文化>B企業文化部>C企業資料館、C資生堂ギャラリーほか 写真資料 旧役員作品>福原信三 書籍 資生堂>福原信三
5.4.2 収蔵機関	資生堂企業資料館
5.4.3 記述規則	アーカイブズの典拠レコード標準: ISAAR(CPF) ICA2004

5.4.6 記述年月日	2016年12月1日
5.4.7 言語	日本語
5.4.8 参考	矢部信壽『福原信三』資生堂(1970) 資生堂編『資生堂百年史』資生堂(1972)
6 管理領域	
6.1 資料情報	『銀座』(資生堂)(1921) 写真集『巴里とセイヌ』(1922) 『光と其諧調』(寫眞藝術社)(1923) 写真集『身辺風景』(資生堂)(1930) 写真集『西湖風景』(日本写真会)(1931) 『写真芸術』(新光社)(1935) 写真集『松江風景』(日本写真会)(1935) 写真集『巴里とセイヌ 複写版』(日本写真会)(1935) 『旅の写真撮影案内』(朝日新聞社)(1937) 写真集『布哇風景』(日本写真会)(1937) 写真集『武蔵野風物』(靖文社)(1943) 『写真を語る』(武蔵書房)(1943) 『写真芸術』(武蔵書房)(1943)
6.2 資料種別	書籍
6.3 関係性	著者

F「福原信三」シリーズのISAD(G)記述(記述式)を表9に示す。この表からも分かるように既存目録では表現できなかった、資料群の説明と内部構造を示すことが出来ている。そして組織歴を記入できることも、頻繁に組織変更が行われる会社組織にとっては有効であることがわかる。信三に関する展覧会、貸出業務が他シリーズに存在する点は3.5.3 関連資料にて記述した。アイテムレベルになると、この形式では目録自体の分量が大きく膨らむ可能性がある。次に表10のリスト型を見ていきたい。

表10は信三の自筆原稿部分のみ示しているが、分量の多いアイテムを管理するのにリスト型が有効であることが分かる。リスト型の階層記述はファイル以下を示すことによってアイテムのまとまりを示せる。また、記述をファイルレベルで止めることもできるため、既存目録のように、アイテムレベルまで細分化する必要性が緩和される効果もある。

このように資料群や階層を表現する必要のあるフォンドからシリーズまではソフトを問わないが記述式、サブシリーズ以下はエクセル表のリストの表記とし、この二つを組み合わせるとというのが資料記述の上でもっとも効果的な方法と考える。

4-3: ISAAR(CPF)^[74]による「福原信三」と「松本昇」の人物記述

ISAD(G)は資料群全体、フォンドとその階層を記述するガイドを提供するものである。一方、アーカイブズの典拠レコード標準であるISAAR(CPF)は、作成者(団体、個人、家)に関する記述の標準である。福原信三記述を表11に、松本昇の記述を表12に示す^[75]。

74 — アーカイブズの典拠レコード標準: ISAAR(CPF)はICAが1995にパリで採択した、アーカイブズ資料の典拠レコードに関する記述規則のこと。作成者(団体、個人、家)に関する記述の標準。
75 — 作成者種別としての通し番号を福原有信(P1)信三(P2)松本(P3)と設定している。

表12 — 「松本昇」ISAAR(CPF)記述

5.1 識別領域	
5.1.1 作成者種別	個人/P3
5.1.2 名前	松本昇 MATSUMOTO, Noboru(1886-1954)
5.2 記述領域	
5.2.1 存続(生存)年月日	1886年5月27日～1954年6月9日
5.2.2 来歴	明治19年(1886)香川県綾歌郡山内村(現高松市国分寺町)の庄屋に生まれる。高松市高松商業卒業、早稲田大学商科へ入学するも退学して渡米。明治45年(1912)ニューヨーク大学卒業(商学士)。翌年帰国し、三越百貨店本店営業部に勤務。大正6年(1915)福原信三(P2)に招かれ資生堂支配人となり、大正12年(1923)チェーンストア制度をとり入れた。昭和2年(1927)資生堂株式会社化、取締役専務に就任。昭和15年(1940)社長就任。昭和25年(1950)参議院議員(自由党)。昭和26年(1951)実業家代表として国際商業会議所リスボン大会に出席。昭和29年(1954)逝去。正六位勲四等に叙せられる。
5.2.3 場所	香川、高松、日本橋、銀座、ニューヨーク
5.2.4 組織	資生堂、三越百貨店、日本粧業会、日本中小企業連盟、東京化粧品工業会、経団連、参議院、自由党
5.2.5 機能・肩書	資生堂取締役社長、日本中小企業連盟副会長、日本粧業会理事長、東京化粧品工業会会長、経団連常任理事、参議院議員
5.2.7 内部構造・系図	父:彦三郎 母:いげ 妻:アキノ 子 ●孝子 ●信子 ●道夫 孫 ●淳(道夫息子:松本資料寄贈者)
5.2.8 文脈、背景	ニューヨーク留学中、昼間はシンプソンのフォード百貨店に勤務、夜はニューヨーク大学学部に通いマーケティングを学んでいた時にコロンビア大学留学中の福原信三と出会い友人となる。帰国後、信三に招かれ、三越を辞め、資生堂の支配人となる。日本では初めての、契約店のみに商品を卸し、定価販売を維持する「チェーンストア制度」を導入する。昭和15年(1940)から亡くなる昭和29年(1954)までの戦争をはさんだ資生堂のもっとも苦しい時期に社長を務めた。戦後は参議院議員となり、中小企業の興隆、化粧品の価格販売維持制度の問題に取り組んだ。
5.3 関連領域	
関連1	
5.3.1 関連する個人、団体の名称	三越百貨店 Mitsukoshi
5.3.2 種類	組織
5.3.3 関係性	社員
5.3.4 期間	1913～1917
関連2	
5.3.1 関連する個人、団体の名称	資生堂 Shiseido
5.3.2 種類	組織
5.3.3 関係性	支配人→取締役専務→代表取締役社長
5.3.4 期間	1917～1954
関連3	
5.3.1 関連する個人、団体の名称	参議院
5.3.2 種類	組織
5.3.3 関係性	参議院議員、参議院通商産業委員、参議院自由党副会長
5.3.4 期間	1950～1954
5.4 管理領域	
5.4.1 資料情報	日本、資生堂企業資料館 文書資料 A歴史>B創業・人物>C松本昇
5.4.2 収蔵機関	資生堂企業資料館
5.4.3 記述規則	アーカイブズの典拠レコード標準:ISAAR(CPF) ICA2004
5.4.6 記述年月日	2016年12月1日
5.4.7 言語	日本語
5.4.8 参考	経営管理研究会「チェーン・ストアの理論と実際(付録:チェーン組織の先覚者 松本昇の人と事業)」(1958) 伊藤肇「ボランタリーチェーンの先覚者 松本昇」時事通信社(1972) 資生堂編「資生堂百年史」資生堂(1972)

このISAAR(CPF)記述では、既存目録と、ISAD(G)記述[表9、表10]では実現していない「信三を主題とする資料群」の記述が「5.4.1 資料情報」によって可能となっている。文書資料のみならず、図書、写真資料まで信三に関するあらゆる資料の所在が確認できる。

二人の記述内容の比較においては、同じ資生堂社長という肩書きであって
も、来歴、人脈、所属組織など、個人の文脈は大きく違うことが理解できる。

資生堂の先行研究^[76]において、以下のような指摘がある。

従来の資生堂研究においては資生堂と直接的な関係が薄いと思われる周辺
領域さらには社会史全般とのダイナミックな関連が掴みにくい傾向にある。とり
わけ資生堂では福原有信、信三ともに社外での活動が結果的に資生堂の
企業イメージに大きく影響を与えており、企業史の周縁に向けた視点は一層
重要になるだろう。

これは資生堂研究に限ったことではないだろう。企業研究がますます盛んになる
中、企業資料におけるISAAR (CPF) 記述はまさにこの企業史の周縁情報の
ガイドとなるものと言えよう。

二人が活躍した時代(大正～昭和前期)は、資生堂が個人事業から脱却し、企
業として成長し始めた時期である。資生堂にとってこの重要な時期を知るため
には、組織資料の情報だけでは不十分である。信三と、彼の経営実務を支えた
松本のISAAR (CPF) 記述を合わせ見ることによって当時の経営実態に近づく
ことができるのである。

4-4:小括

ここでは本章で取り組んだISAD(G)記述、ISAAR(CPF)記述が、既存目録
の課題をどの程度解決できたかを検証し、本章のまとめとする。

まず、ISAD(G)記述(表9、表10)において、既存目録の課題を2点解決した。
それは、1. アイテムレベルまでの記述とそれに伴う資料情報の充実を図ること
ができたこと。そして、2. 資料構造と階層を示すことが出来たことである。

1点目の資料情報の充実を果たして有効か、キーワード検索における比較を
試みた^[77]。「福原信三」資料において検索される可能性の高い「写真(写真)」「
広告」「香水」「銀座」「芸術(藝術)」の5語についての検索を試みた。結果は
以下の表13の通りである。

この結果からも分かるように全体的に検索ヒット数の向上が認められる。

具体的な検索結果を「香水」のキーワードで確認する。既存目録による検索
結果は以下の1点であった^[表14]。

76 — 戸矢、前掲62、55頁

77 — ISAD(G)目録はエクセルで作
成していたため、エクセルの検索機能
を使用した。ここに示す検索結果はヒット「セ
ル」数ではなく、ヒット「資料」数である。

表13 — 既存目録と福原信三
ISAD(G)記述(新目録)の検索結果の違い

キーワード	既存目録	新目録
写真(写真)	23	57
広告	2	10
香水	1	6
銀座	0	15
芸術(藝術)	3	19

表14 — 既存目録での「香水」による検索結果

分類A	分類B	分類C	入力No.	資料名	制作年	発行部門	収蔵棚No.
歴史	創業・人物	福原信三	130421002N	「新装」第1巻第3号 福原信三「香水の話」コピー	1935		L15C

表15 — 「福原信三資料ISAD(G)記述」の「香水」による検索結果(空欄の行は非表示)

3.1.4 記述レベル	3.1.1 参照コード (資料番号)	3.1.2 タイトル	3.1.3 年代	3.1.5 記述単位の大きさと媒体 (量、容積、または寸法)	数量
アイテム	F-1-1(091022026M-16)	香水 匂いと香料	1927	福原原稿用紙(自筆)	16枚
アイテム	F-1-1(091022026M-28)	香水雑話	1933	福原原稿用紙(自筆)	11枚
アイテム	F-1-1(091022026M-47)	香水銀座	不明	福原原稿用紙(自筆)	4枚
アイテム	F-1-1(091027051M-1)	その人の顔や姿で香水も変わる 福原信三氏談	1927	記事スクラップ	1点
アイテム	F-1-1(091027051M-2)	春の香水には 植物性の匂い 福原信三氏談	1927	記事スクラップ	1点
アイテム	F-1-2(130421002N)	福原信三「香水の話」コピー	1935		

78 — 資料番号091022026M-20「化粧品
の容器の材質及び形状の最近の
傾向」、091022026M-16「香水匂いと
香料」の2点を生産技術関係(社内)の
閲覧に供したというフィードバックを得られ
た。(資生堂企業資料館、中野氏への聞き取
り調査による。2015年5月20日)

79 — 企業資料館で自筆原稿・書簡・
インタビュー記録をさらに細分化したデー
タを作成し、年史編纂の資料として使われ
ているとのことである。(資生堂企業資料館中
野氏の聞き取り調査による。2016年11月2日)

しかし、今回整えた新目録「福原信三資料ISAD(G)記述」では自筆原稿3
点を含めた以下の6件がヒットする。[表15参照]

このように、必要な資料へアクセスしやすくなっただけでなく、そのトピックに対
してどのような資料が何点あるかを正確に読み取ることができるようになった。

また、企業資料館からのフィードバックとして、この資料調査以降、実際に新目
録を利用した閲覧実績[78]が生まれており、社史編纂[79]の情報源としても活用
されているとのことである。

2点目の資料構造と階層を記述する中で、他シリーズに存在する展覧会関
係資料についても関連付けができています。このことにより、これまで複数のシリー
ズにまたがるものが自覚されていなかった業務資料のつながりを明示することが
できました。

次に、既存目録では福原信三、松本昇ともに、その人物に関する説明はない。
そのため、必要であれば、彼らの伝記を参照するしかなかったわけですが、ISAAR
(CPF)記述によって、簡潔に当該人物の軌跡を確認できることとなった。さら
に、本人に関連する収蔵資料が一覧で確認できるようになったことの利便性は
大きい。ここで取り上げた人物は伝記が発行されているため、情報が比較的取
りやすい。しかし、組織内アーカイブズにおいては、伝記類が残されていない人
物の記述を怠らないことがむしろ重要である。本人の退任後、時間が経ったの
ちに個人の活動情報を追うのは困難を伴う。現在の状況から早々に記述するこ
とが最も効率的であり、後に役立つドキュメンテーションを作ることもアーカイブズ
機関の役割である。その情報はのちに企業史における周縁情報として貴重な情
報源となるだろう。

5 — おわりに

本稿は資生堂企業資料における経営者関係資料「福原信三」を題材に、アー

3.2.1 作成者名	収蔵欄No.	3.3.1 範囲と内容	3.4.2 複製を規定 〔統制〕する条件	3.5.4 出版について の注記	3.6.1 備考
福原信三	L15C		原	『御婦人手帳』	
福原信三	L15C		原	「セルパン」第7号	
福原信三	L15C		原		商品能書用?
(福原信三)	L15C	その人の顔や姿で香水も変わる ここまで行かねば本当ではない 段々目立つその個性化	原	『都新聞』3月1日 第14085号	
(福原信三)	L15C	春の香水には 植物性の匂い 柔らかいものが多い、東洋的に なった外国の香水	原	『都新聞』3月2日 第14086号	
	L15C		複	『新装』第1巻第3号	

カイバル目録記述により、既存目録の課題を解決することと、企業資料における経営者関係資料の考察を行った。企業資料をめぐる研究史を概観し(第1章)、調査対象の確認と既存目録の課題を洗い出し、資料調査を行った(第2章)。その結果、この資料群は伝記編纂のために収集された個人資料を含む組織資料、そして、それとは別の文脈で蓄積された資料の混合体であることがわかった。この資料群の構造を示し、現在の文書編成上の課題を指摘した。個人資料からは信三の思索の痕跡と、言論活動を通じた社会との交流が伺えた。そして、それは資生堂経営に密接に結びついていた(第3章)。ISAD(G)を適用した新目録では、資料群の構造と階層を示し、資料情報を充実させたことにより、既存目録の課題を解決した。ISAAR(CPF)の人物記述では、当該人物の軌跡を確認できるだけでなく、複合的に見ることで、当時の経営実態に迫ることができることを確認した(第4章)。

これまでの考察から得られた結論を二点述べる。

一点目は資生堂企業資料における「福原信三」資料の存在についてである。

基本的に機能名で整えられている文書資料シリーズ内において人名がタイトルとなっていることは、それだけ資生堂にとって大きい存在だという事を示している。資生堂が伝記を発行している人物は福原有信、信三の2名のみであることから、そのことが伺える。信三の活動内容は、一見文化人、趣味人に近い。しかし、信三が経営に全く関心がなく、趣味がただの趣味で終わっていたならば、資生堂ギャラリーは社業のひとつとして現在まで残らず、銀座という土地が資生堂に大きなアイデンティティをもたらすこともなかったであろう。信三は経営実務を松本に託すことによって自分の仕事に没頭した。それは芸術を探求し、流行を考え、発信する事であり、「商品の芸術化」という経営理念となって社業に反映された。また、「銀座」の街づくりに大きく関与すると同時に「東京銀座資生堂」をブランドイメージとして打ち出していく。信三の没後も、彼のビジョンに組織が共鳴し、今日の資生堂という個性を形作ってきた。資生堂にとって「福原信三」資料は組織のアイデンティティの源泉を内包するものであり、それだけに重要な資

80 — 前身となるアーカイブズ機能を持った施設は同じ敷地内に存在する資生堂アートハウス(1978年開館)である。企業資料館の活動と合算すると38年もの資料収集の歴史があることになる。

81 — 前掲18、15頁

82 — 企業資料館佐藤氏への聞き取り調査(2014年9月3日)によると「90年代に策定していた旧分類では分かりにくく、資料検索にも不都合が生じていた。2000年代に少しずつ分類の改定を加えていき、現在のような分類となっていた」とのことである。

83 — 「デジタル時代のビジネス・アーカイブズ」『企業と史料』第8集、企業史料協議会、2013年、77頁

84 — 企業資料に関して、収集された資料類の分析や研究は見られるが、「資料収集システム」についての事例は管見の限り見当たらない。

85 — 図1でも明らかなように、商品資料、宣伝制作資料を合わせて13万点を超え、資生堂企業資料全体の半数以上を占める。

86 — 「シリーズシステム」とはオーストラリアにおいて30年以上の実績を持つ編成方法で、フォンドレベルではなくシリーズレベルで管理するというのが特徴である。エージェント(組織、部門、人物)と、組織機能(活動)を資料群から切り離して記述した上で、それぞれをリンクさせる、という方法である。Keeping Archives, 3rd Edition, Australian Society of Archivists Inc., Canberra, 2008.

料群なのである。このことが自覚的でないにせよ、企業アーカイブズにおいて個人資料を受け入れる理由のひとつであろう。社会、人脈、地域活動など多面的な要素を持つ個人資料は、組織資料とは違う役割を持ち、会社の歴史や社会的な位置付けを別方向から説明しうるものである。

二点目は企業資料館の活動実績についてである。企業資料館^[80]は1992年の開館以降、20年以上かけて自社資料を収集し、整理し続けてきた。1996年ごろの文書資料分類はまだ仮の段階^[81]であったが、試行錯誤を繰り返して文書資料編成を改良させてきた^[82]。現場で蓄積された知見が、現在の組織機能に即したカテゴリを策定している。これは資料を通して、組織活動、ひいては「資生堂とは何か」を問い続けた結果である。その経験と知見を元に「資料収集ガイドライン」(企業文化部、2011)^[83]を策定し、資料が自動的に企業資料館に収集される仕組みを確立した。これは、企業アーカイブズにおいても特筆すべき事例である^[84]。また、文書資料とともに、圧倒的な数の商品資料、宣伝制作資料が企業資料館活動を支えている^[85]。企業資料館は資生堂にとって知的財産であり、経営資源でもある。

おわりに今後の課題を述べる。

まず、本論では「福原信三」資料の理解のため、松本資料を補助的に参照してきた。しかし、松本は信三にとって補助的な役割ではなく、当時の資生堂経営においては車の両輪のような存在であった。そのため、信三時代の資生堂経営の研究をさらに深めるためには、松本資料の調査分析も十分に行うことが必要となる。

次に、同一業務が多シリーズにまたがって存在することについてである。本稿で試みたISAD(G)記述では、資料の関連性を記述するにとどまり、同一業務のまとまりを説明するには至らなかった。オーストラリアのシリーズシステム^[86]などの適用で問題解決につながる可能性があるが、この点については今後の課題としたい。

最後に、本研究によって、企業アーカイブズ機関が、散逸しがちな個人資料の受け入れ先となる可能性を示唆するものと考えますが、この点についても今後の課題としたい。

[謝辞]

本稿の執筆にあたり、資生堂企業文化部、資生堂企業資料館には資料提供、アーカイブズ実習の受け入れ等、多大なるご協力をいただいた。特に資生堂企業資料館 石井光学館長、大木敏行館長(当時)、佐藤朝美氏、中野征士氏には大変お世話になり、厚く御礼申し上げます。